

# 説

# 教

ダニエル書 4 章 24～27 節

使徒行伝 1 章 6～11 節

「天に昇られしキリスト」

2013・11・17 (説教13461510)

私たちの教会では復活節（イースター）、聖霊降臨節（ペンテコステ）、そして降誕節（クリスマス）の3つを「三大節」と呼びます。特別な礼拝を献げる喜びの日です。この「三大節」は全て日曜日です。しかし日曜日ではない教会の祝日もあります。たとえば「昇天日」と言われる日がそれです。復活の主イエス・キリストの昇天を記念する日です。イースター礼拝後の 40 日目ですから必ず木曜日になります。ちなみに来年のイースターは 4 月 20 日(日)で、昇天日は 5 月 29 日(木)です。そこで、私たち日本のキリスト者はこの「昇天日」を特別な礼拝の日として祝うことはありませんが、ヨーロッパなどに参りますと昇天日は“国民の祝日”として休日になっています。ドイツなどでは春の訪れが遅い所為もありますが、昇天日の頃が一年で最も美しい季節です。ちょうど北海道の春のように一斉に花が開きます。そのような光景の中でプロテスタント、カトリックを問わず、どこの教会でも昇天日の特別な礼拝が献げられます。歴史をたどるなら、すでに西暦 325 年「昇天日」はニカイア信条の制定と共に特別な礼拝の日に定められました。三大節に劣らぬ古い歴史を持っているのです。

大切なことは、私たちがドイツの教会の真似をして「昇天日」に特別な行事を行おうではないか、ということではありません。そうではなく、すでにキリストの復活を記念する日曜日のどの礼拝においても、そこで福音が宣べ伝えられ礼拝が献げられるとき、キリストの昇天の出来事も、いつも信仰をもって覚えられ、感謝と讃美が献げられているかどうか大切です。たとえば私たちは、毎週の礼拝のたびに使徒信条を初代教会のように歌って告白します。そのたびに私たちは「(主は) 十字架につけられ、死して葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の中からよみがえり、天に昇り」と告白するのです。だからこそ、その私たち一人びとりに問われています。「あなたは、主が『天に昇られた』という告白を、あなたの“救いそのものの出来事”として、いつも健やかに信じていますか？」と。

洗礼準備会などでしばしば経験することですが、使徒信条の中でどの部分がいちばんわかり辛いかと訊ねたとき、多くの人がこの「天に昇り」という言葉が「わかりづらい」と言います。言葉の意味がよくわからないというのではなく、それがどうして私たちの「救い」なのか「わかりづらい」ようです。これは洗礼志願者だけではないと思うのです。キリストの「十字架」や「復活」が「私の救いの出来事」として理解できる人も、こと「昇天」ということになると、途端に歯切れが悪くなってしまっているのではないでしょうか？。主イエス・キリストは甦られて、私たちのため、そして全世界のために、罪と死とを完膚なきまでに打ち滅され“天に昇られ”ました。英語の使徒信条の翻訳をみますと、この「昇られた」と訳された言葉に「優位に立つ」という意味の言葉が使われています。ただ眼に見えるひとつの事実として主は“天に昇られ”

ただけではない。天に昇られた主はなによりも“復活の勝利の主”なのです。私たちの底知れぬ罪と死の縄目を、その滅びの力もろとも担い取って下さり、私たちが真の自由へと解き放って下さった救い主（慰め主）なのです。まさにその“復活の勝利の主”を私たちは、全世界の永遠の救い主として「天」に持つ者とされている。それがキリストの昇天の意味する恵みです。主は私たちが支配する罪と死に対して永遠に「優位」に立ちたもう。たとえ罪がいかに激しく私たちが滅びに引きこもうとも「昇天の主」の御前には、もはや罪は優位性を持ちえないのです。キリストが絶対優位に立ちたもうて、私たちが存在の深みから守り支えていて下さるのです。それが「昇天の主」の福音が告げる第一の祝福です。

それだけではありません。私たちのために罪と死に永遠に勝利し優位に立ちたもうた主は、その恵みの勝利を「天」に確保して下さいます。これを「たしかな保障」と言い換えることができるでしょう。私たちの救いの「根拠」と言ってもよい。ごく単純に申してよいのです。私たちは弱く脆い自分自身の中に救いの「根拠」（または保障）を持つのではない。そうではなく、私たちは救いの確かな「保証」を「天」に持つ者とされているのです。なぜか、それは復活の主が“天に昇られ”たかただからです。とても単純なことです。だからこそ、そこには確かな慰めと祝福があります。キリストの昇天の恵みの内に、私たちは自らを、そして全ての人々を、そして世界と歴史とを新たに見いだすのです。

ある一人の優れた神学者がこういうことを語っています。「天から来られて、私たちのために苦しみを受け、罪と死に勝利されて、全ての救いの御業を全うして下さった主が天にお帰riになるのは、当然のことではないか」。私はこの言葉に接して、改めて心を揺り動かされました。「ことさら問うべきことではさえない」とこの神学者は言うのです。「それは当然のことだ」と言うのです。私たちはクリスマスにおいて、主が神の御子でありつつ、人として生まれて下さったことを喜び祝います。そこに私たちの、また全世界の救いがあることを知り、感謝と喜びを主に献げます。またイースターにおいては、私たちのために十字架を担われた主が、墓を（陰府を＝罪と死の支配を）打ち破り、甦られたことを喜び祝い、そこに私たち自らの「よみがえり」（救い）があることを知り感謝します。それならば、天から降られて人となり、全ての救いの御業を成し遂げて下さった主が「再び天に昇られた」ことはまさに「当然のこと」ではないでしょうか。キリストが勝利して下さったのです。そしてその勝利を「天」に「確保」して下さったのです。弱い私たちの手に勝利を委ねて去ってゆかれたのではないのです。その勝利を「保障」して下さるために、主みずから“天に昇られ”たのです。私たちが揺るぎない恵みに生きる者として下さったのです。だからこそキリストの昇天の福音は私たちの救いそのものなのです。

私たちの葉山教会の礼拝堂の入口左側にラテン語で大きく「スルスム・コルダ」（Sursum Corda）と刻まれています。この礼拝堂を献堂して早くも14年目を迎えようとしています、最初はもう少し小さい字になる予定でした。しかし何かの手違い

で予定の倍ぐらいの大きな字になりました。私はむしろ幸いであつたと思っています。これは「心を高く上げよ」という意味のラテン語で、初代教会以来、私たちの教会が聖餐式のたびごとに献げてきた祈りの言葉です。否、これは毎主日ごとの礼拝において深く覚えらるべき祈りです。私たちはここで、まさに「心を高く上げ」て「昇天の主」を仰ぐのです。そこには私たち全ての者のために完全な救いの「保障」をしていて下さる勝利の主が栄光の御座に坐しておられるからです。

だから私たちは、この世の旅路の中で、どんなに大きな試練や悩みの中にあるときにも、自らの救いを疑わずにすむのです。たとえいかに私たちが不確かであり弱くとも、私たちを終わりまで堅く支えたもうキリストの御手の確かさを疑わない。そのような幸いに生きる私たちとされているのです。私たちがキリストから引き離そうとするいかなる力も、もはや私たちの「優位」に立つことはありえないからです。私たちの救いの「保障」は「天」にあって、私たちの中にあるのではないからです。この「天」とはキリストの御国です。もともとは「キリストの恵みの支配」という意味のギリシヤ語です。私たちはキリストの御身体なる教会に連なることによって、このキリストの御国の民とならせて戴いています。だから使徒パウロは「わたしたちの国籍は天にある」とさえ申しました。

今朝の御言葉である使徒行伝の1章6節以下、特にその10節と11節において、天に昇ってゆかれる主イエスを呆然と仰いでいた（つまり天を仰いで佇んでいた）弟子たちに御使い（天使）が来て決定的なことを告げます。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に昇って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。ただ天を仰いで立っているというのは、過去の思い出に浸っていることです。主イエスが親しく共におられた、その恵みを「過去のこと」にしてしまうことです。御使いは「それではいけない！」と弟子たちを叱責します。「なぜ天を仰いで立っているのか」と告げるのです。「それどころではない！」と言うのです。救いの御業を十字架と復活において成就して下さったキリストは、新しい“教会の時代”をお始めになったではないか。天を呆然と仰いで思い出に浸っている場合などではない。キリストが「天に昇られ」たという出来事こそ、私たち全ての者にとって限りない慰めであり喜びなのです。なぜか？。宗教改革者ルターの言葉を紹介しましょう。ルターはある説教の中でこういうことを語っているのです。「主が近くおられたとき、主は私たちから、遠くあられた。主が私たちから遠いとき、主は私たちに近くおられる」。

その意味はこうです。もし主イエスが目に見えるお姿を持ったまま、いわば眼に見えるかたとして私たちの中に留まり続けておられたなら、私たちは主がいま教会を通してなされている救いの御業にあずかることはできなかった、ということです。全ての人が主のもとに集まって主に従うことなどできなかったでしょう。たとえば、もしキリストが眼に見える姿でイスラエルのどこかに本拠地（本山）を構えておられたなら、救いを受けたいと願う人々はみなイスラエルまで行かねばならないことになる。

主はそのようなかたではないのです。全ての人々と共におられ、教会を通して限りない救いの御業を今なしたまい、全ての人々に恵みの支配を（祝福を）与える道を開かれたのです。だから主が「天に昇られ」たことは、私たちから遠く離れたもうたことではない。その逆なのです。いま主は「昇天の主」として、私たちと今も後も永遠までも「共に」いらして下さるのです。

そのことは、たとえばマタイ伝の最後の 28 章 20 節でも明らかです。そこで主は、弟子たちを伝道のわざにお遣わしになり「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」とはっきりと語られました。私はもう天に帰るのだから、これから先はあなたがたと一緒にいられないと言われたのではないのです。そうではなく「これから後は、いつもあなたがたと共にいる」と宣言して下さったのです。私たちはこのマタイ伝の最後を読む時に「ああ、主イエスは弟子たちといつも一緒におられたのだな」とは読まないのです。「まさに主はいまこの私と共にいて下さるのだ」と読むのです。そのようにしか読みえないのです。

私たちの教会にとって忘れえない先達の一人に植村正久という牧師先生がおられます。かつて東京は富士見町教会の牧師であり、また日本最古の神学校として東京神学社を創立されたかたです。この植村牧師は洗礼試問会の問いの中で「主イエスはいま、どこにおられますか？」という問いをととても大切にされたそうです。私たちでしたらどう答えるでしょうか。主は私たちが苦勞して捜さなければお会いできないかたではない。私たちはこの世の戦いの中に取り残されてしまったのではないのです。そうではなく、主イエス・キリストは、今も後も永遠までも、私たちの贖い主・救い主として、まさに「昇天の主」として、永遠までも私たちと共におられるかたなのです。まさに勝利の主として「天」に私たちの救いの「保障」を置いて下さったかたなのです。だからこそ私たちは、このかたの恵みの支配のもとに、心を高く上げて、喜びと感謝と平安をもって歩むことができるのです。